６３６１－１０１３
平成２３年６月２４日

各関係機関の長
各病害虫防除員　　殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成２３年度病害虫発生予報第３号について

平成２３年度病害虫発生予報第３号を発表したので送付します。

平成２３年度病害虫発生予報第３号

向こう１か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

○発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の平年比	記載ページ
早期水稲	1 穂いもち※※ 2 紋枯病 3 斑点米カメムシ類※	やや多 並 並	2 2 2
普通期水稲	1 葉いもち※ 2 ウンカ・ヨコバイ類 3 コブノメイガ 4 スクミリンゴガイ	並 並 ― やや多	2 3 3 3
野菜・工芸作物全般	1 アブラムシ類 2 ハスモンヨトウ等チョウ目（鱗翅目）害虫※	並 やや多	3 3
ウリ類	1 黄化えそ病(MYSV)	―	4
いちご(親株)	1 炭疽病※※	―	4
果樹全般	1 果樹カメムシ類※	やや多	5
カンキツ(露地栽培)	1 黒点病 2 かいよう病 3 ミカンハダニ 4 チャノキイロアザミウマ	並 並 やや多 並	5 5 6 6
茶	1 炭疽病 2 カンザワハダニ 3 チャノコカクモンハマキ 4 チャハマキ 5 チャノホソガ 6 チャノミドリヒメヨコバイ 7 チャノキイロアザミウマ 8 クワシロカイガラムシ	並 やや多 やや多 やや多 並 並 並 やや少	6 6 6 7 8 8 9 9

※※は注意報、※は防除情報を発表

○ 作物の生育状況（６月中旬）

早期水稲は穂ばらみ期、普通期水稲は移植前後、うんしゅうみかんは果実肥大期、茶は二番茶摘採前後であった。

○ 向こう１か月の気象予報

天気は平年に比べ曇りや雨の日が少なく、気温は高い確率60％、降水量は少ない確率50％、日照時間は平年並または多い確率ともに40％と予想されている。

（１か月予報　鹿児島地方気象台６月１７日発表）

○ 発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1　穂いもち　（やや多）

※　平成23年度病害虫発生予察注意報第1号（6月16日発表）参照

［予報の根拠］

（１）６月中旬の巡回調査における葉いもちの発生面積率46.9％（平年18.4％）、発病株率6.8％（平年5.5％）はいずれも平年よりやや多である。

［防除上の注意］

（１）葉いもちが発生している場合は、穂ばらみ期から穂揃期の防除を確実に行う。

（２）雨が続く場合、感染の危険性が高いので雨間をみて防除を行う。

2　紋枯病　（並）

［予報の根拠］

（１）６月中旬の巡回調査では発生未確認である。

（平年値：発生面積率0.9％、発病株率0.07％）

［防除上の注意］

（１）穂ばらみ期の防除が基本となるが、上位葉鞘への進展が続く場合は２回目の散布を行う。

3　斑点米カメムシ類　（並）

※　平成23年度病害虫発生予察防除情報第4号（6月9日発表）参照

［予報の根拠］

（１）６月中旬の圃場でのすくい取り調査による発生面積率15.7％（平年15.2％）、すくい取り虫数0.8頭（平年1.7頭）はいずれも平年並である。

［防除上の注意］

（１）米の上位等級確保のためには、穂揃期とその７～１０日後の２回防除を厳守する。その後も発生が見られる場合には追加防除を行う。

（２）出穂の早い水田には集中的に飛来する恐れがあるので注意する。

（３）防除効果を高めるため、一斉防除に努める。

普通期水稲

1　葉いもち　（並）

※　平成２３年度病害虫発生予察防除情報第5号（6月16日発表）参照

［予報の根拠］

（１）６月中旬の巡回調査では、本圃においては発生未確認であるが、置き苗では発生が確認されている。

（平年値：発生面積率1.1％、発病株率0.1％）

（２）６月のアメダス観測結果を基にしたBLASTAM判定によると、本病の感染好適条件が、県内各地域で複数回、散発的に発生している。

［防除上の注意］

（１）本田での初発生に注意し、初期防除を徹底する。雨が続く場合、感染の危険性が高いので雨間をみて防除する。

（２）苗いもちが発生していた場合、保菌率が高く本田で蔓延しやすいので、防除を徹底する。

2　ウンカ・ヨコバイ類　（並）

［予報の根拠］

（１）６月中旬の巡回調査におけるウンカ・ヨコバイ類の発生は未確認である。

（発生面積の平年値：ツマグロヨコバイ5.7%、セジロウンカ1.5%、ヒメトビウンカ1.7%）

（３）セジロロウンカの飛来が、県内4か所（都城、国富、佐土原、延岡）に設置している予察灯において、6月第2半旬から確認されている。

［防除上の注意］

（１）育苗箱施薬剤を実施したほ場では、薬効期間や発生状況を考慮して防除する。

（２）梅雨期に飛来成虫が著しく多く、株当たり虫数が４頭以上（セジロウンカ）になると、稲の生育が抑制されるので早めに防除する。

（３）セジロウンカ、トビイロウンカについては、病害虫防除・肥料検査センターのホームページ等で提供する飛来情報に注意する。

3　コブノメイガ　（－）

［防除上の注意］

（１）本年度は、6月13日に本県への初飛来が確認された。防除適期は、飛来世代の次世代の発蛾最盛期に粒剤を施用するのが効果的であるので、病害虫防除・肥料検査センターのホームページ等の病害虫発生動向に注意する。

4　スクミリンゴガイ　（やや多）

［予報の根拠］

（１）6月中旬の発生面積率47.0%（平年14.5%）は平年より多、㎡当たり貝数0.2頭（平年0.3頭）は平年並である。

［防除上の注意］

（１）水稲の被害は、田植え直後から３週間が著しく、その時期に深水状態ほど食害が激しいので、活着後は浅水で管理する。

（２）貝の生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施薬を行う。

（３）粒剤の水面施薬に際しては、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも7日間はかけ流しや落水はしない。

野菜・工芸作物全般

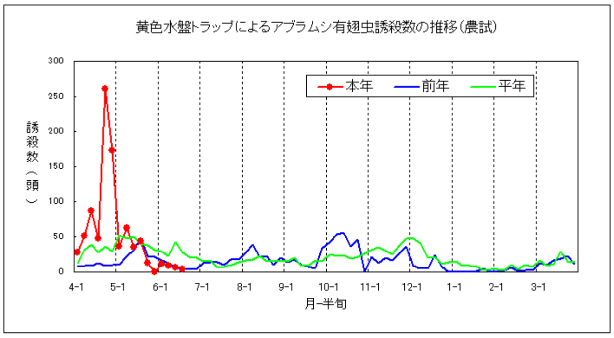
1　アブラムシ類　（並）

［予報の根拠］

（１）黄色水盤トラップ（佐土原）による誘殺数は平年並で推移している。

［防除上の注意］

（１）各種のウイルス病を媒介するので、発生初期の防除に努める。



2　ハスモンヨトウ等チョウ目（鱗翅目）害虫　（やや多）

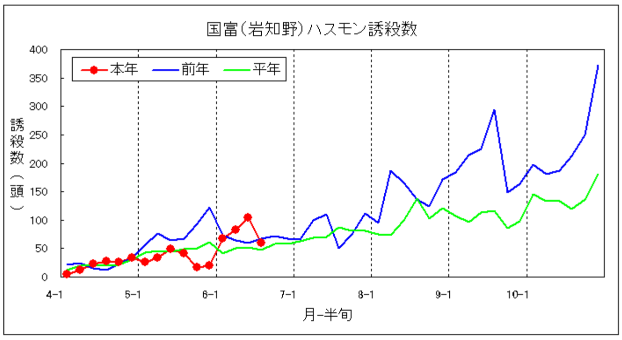
※　平成２３年度病害虫発生予察防除情報第6号（6月24日発表）参照

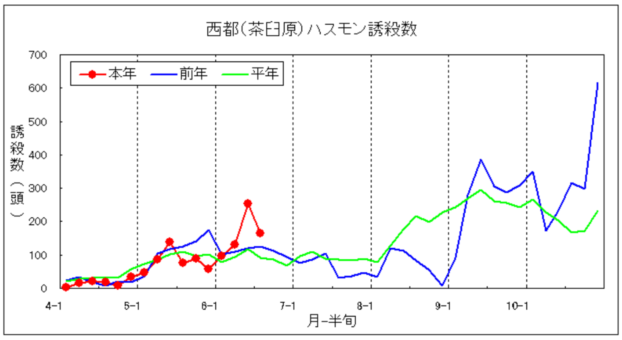
［予報の根拠］

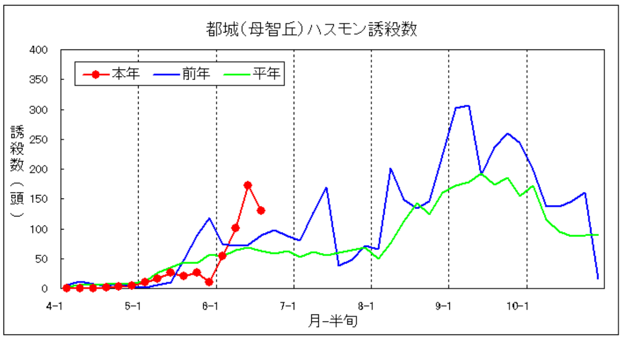
（１）フェロモントラップ（都城、国富、西都、佐土原）によるハスモンヨトウの誘殺数は平年よりやや多く推移している。

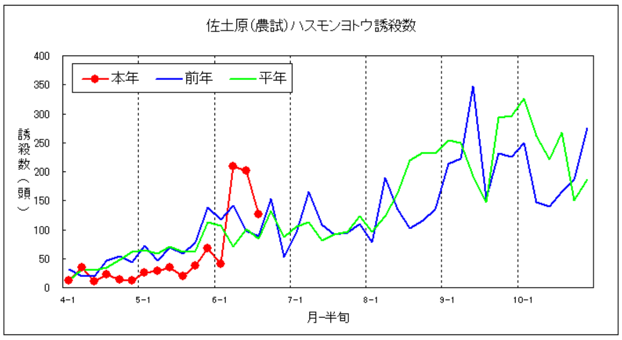
［防除上の注意］

（１）早期発見に努め初期防除を徹底する。









ウ リ 類

1　黄化えそ病（MYSV）

［防除上の注意］

（１）本病は、昨年から一部の地域で発生が確認されており、発生拡大が懸念される。

（２）本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬され、発生後は急激に蔓延する恐れがあることから、今後厳重な警戒が必要である。

（３）媒介虫であるミナミキイロアザミウマの生息密度を抑制するため、定期的に防除するとともに、誘殺のための青色粘着板の設置や圃場周辺の除草に努める。

（４）本病と疑われる症状が発生した場合は、最寄りの西臼杵支庁・農林振興局（農業改良普及センター）または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡する。

いちご（親株）

※　平成２３年度病害虫発生予察注意報第2号（6月24日発表）参照

1　炭疽病

［防除上の注意］

（１）5月中旬から6月上旬にかけて調査圃場の親株から採取した葉を検定した結果、感染ほ場率63.7％（H22：60.0％、H21：12.5％）、潜在感染株率28.2％（H22：11.0％、H21：1.3％）といずれも過去6年間で最も高く、注意が必要である。

（２）親株における本病の検定に努め、感染株が確認されれば、感染株に隣接した株も感染の恐れが高いため、あわせて廃棄処分する。

（３）感染した株を圃場近くに放置すると、大雨等により菌が拡散する恐れがあるため、苗床や栽培圃場からできるだけ離れた場所に埋却する等適切に処分する。

（４）健全な親株の定期的な更新に努める。

果樹全般

1　果樹カメムシ類　（やや多）

※　平成23年度病害虫発生予察防除情報第3号（5月27日発表）参照

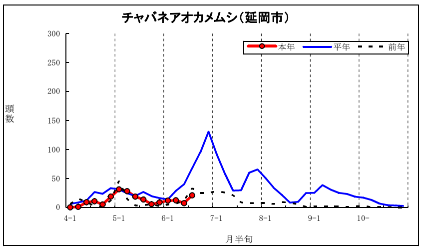
［予報の根拠］

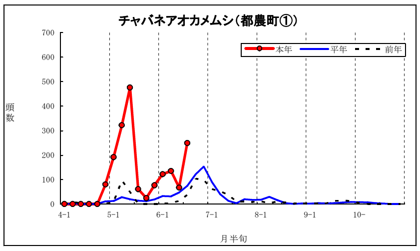
（１）県内3か所（延岡、都農①、都農②）に設置したフェロモントラップ調査では、チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシともに都農での誘殺数が多くなっている。

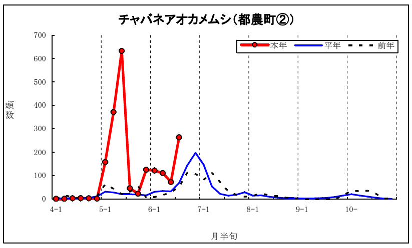
［防除上の注意］

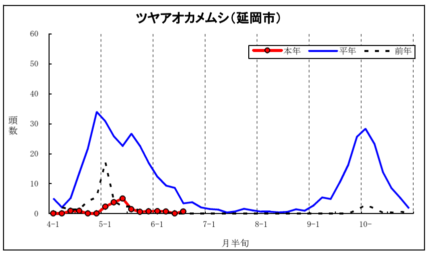
（１）果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動する。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努める。

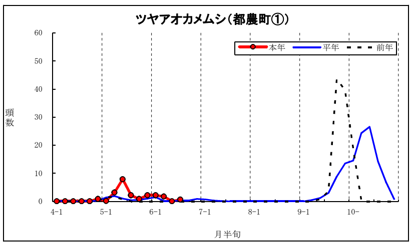
（２）成熟・着色の早い果実を集中加害する傾向があるので、今後ナシ等は特に注意する。

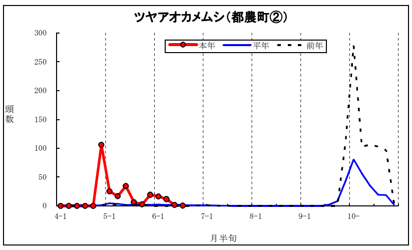












カンキツ

1　黒点病　（並）

［予報の根拠］

（１）６月中旬の巡回調査では、18ほ場のうち2ほ場で微発生が確認されている。
（平年値：発生面積率24.1%、発病葉率0.8%）

（２）向こう1か月の降水量は平年より少ない確率50%と予想されているが、梅雨入り以降の降水量が多い状況にある。

［防除上の注意］

（１）感染源である枯れ枝の除去に努める。

（２）降水量が多いほど発生が多くなるので、前回の防除から積算降水量300mmを散布間隔の目安として薬剤散布を行う。

2　かいよう病　（並）

［予報の根拠］

（１）６月中旬の巡回調査における春葉では発生面積率11.1%（平年16.1%）は平年並、発病葉率0.6%（平年1.4%）は平年よりやや少である。

［防除上の注意］

（１）発病した枝葉は、伝染源となるため可能な限り除去し、園外に持ち出し適切に処理する。

（２）梅雨期に予防散布する。

（３）風雨による枝葉の損傷を軽減するため、防風垣等を整備する。

（４）台風の襲来が予想される時は、事前に薬剤散布を行う。
（５）ミカンハモグリガの被害は、格好の病原菌侵入口となるので、夏秋梢の発生の多いほ場では防除を徹底する。

3　ミカンハダニ　（やや多）

［予報の根拠］

（１）６月中旬の発生面積率27.8%（平年21.8%）は平年よりやや多、寄生葉率2.3%（平年1.4%）は平年より多である。

［防除上の注意］

（１）生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%（１葉当たり虫数0.5～1頭）を目安に防除を行う。
（２）同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を実施する。

4　チャノキイロアザミウマ　（並）

［予報の根拠］

（１）６月中旬の発生面積率5.6%（平年2.9%）は平年よりやや多、寄生果率0.1%（平年0.2%）は平年並である。

［防除上の注意］

（１）５月中旬から９月上旬の間、数回防除する。
（２）防風垣にイヌマキが植栽されているほ場では、その新芽にも寄生するので同時に防除する。
（３）きんかん栽培では、昨年アザミウマ類による果実の被害が発生したので、花等への寄生状況に十分注意するとともに、開花～幼果期における防除を徹底する。

茶

1　炭疽病　（並）

［予報の根拠］

（１）６月中旬の発生面積率29.4%（平年29.9%）、㎡当たり病葉数2.4葉（平年2.0葉)はいずれも平年並である。

［防除上の注意］

（１）二番茶残葉に炭疽病の発生みられる茶園では、三番茶でも多発する恐れがあるため、三番茶萌芽期～1葉期に重点的に防除する。

2　カンザワハダニ　（やや多）

［予報の根拠］

（１）６月中旬の発生面積率64.7%（平年43.5%）は平年よりやや多、寄生葉率6.4%（平年6.8%）は平年並である。
（２）向こう1か月の天気は、平年と比べ曇りや雨の日が少ないと予想されている。

［防除上の注意］

（１）同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を実施する。

3　チャノコカクモンハマキ　（やや多）

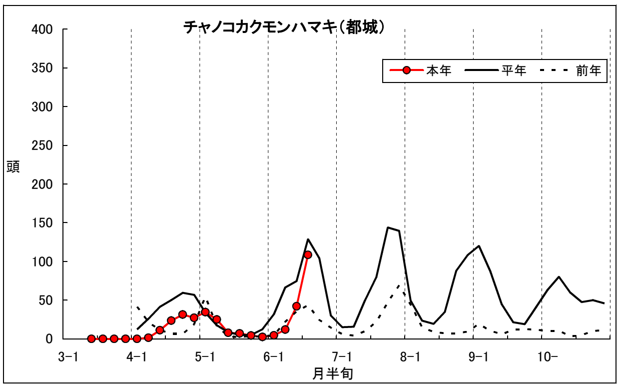
［予報の根拠］

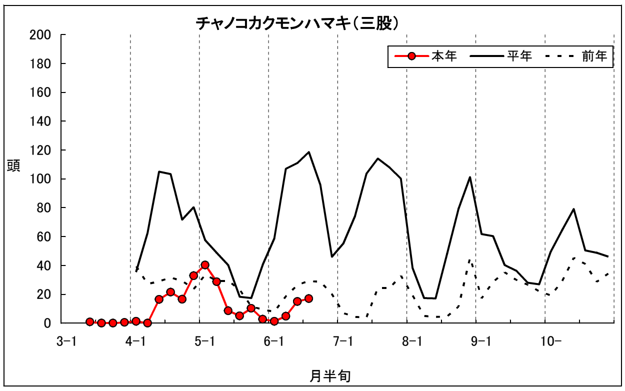
（１）６月中旬の発生面積率5.9%（平年0.0%）は平年より多、㎡当たり虫数0.1頭（平年0.0頭)は平年よりやや多である。

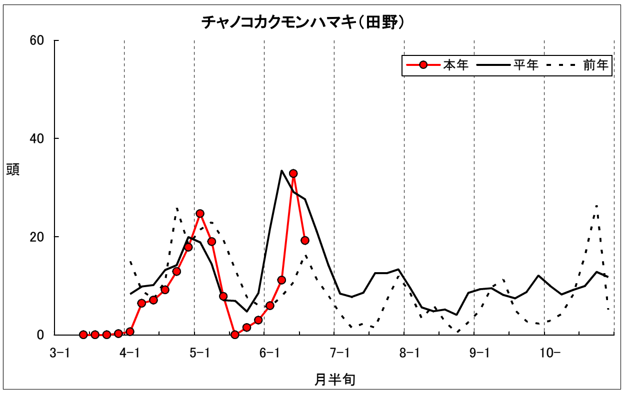
［防除上の注意］

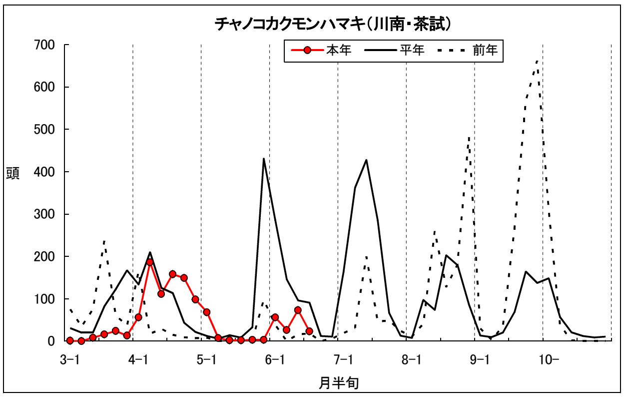
（１）県内4か所（都城、三股、田野、川南）に設置しているフェロモントラップ調査では、発生消長は平年より１～２半旬ほど遅れて推移しており、次の発蛾最盛期は7月下旬と考えられる。
（２）顆粒病ウイルスによる防除適期は、発蛾最盛期の１０日後であるが、この時期は

紫外線が強く顆粒病ウィルスの活性が低下しやすいので、曇天日や夕方に散布する。









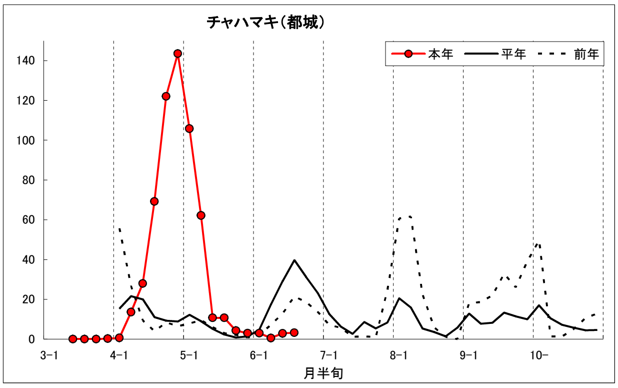
4　チャハマキ　（やや多）

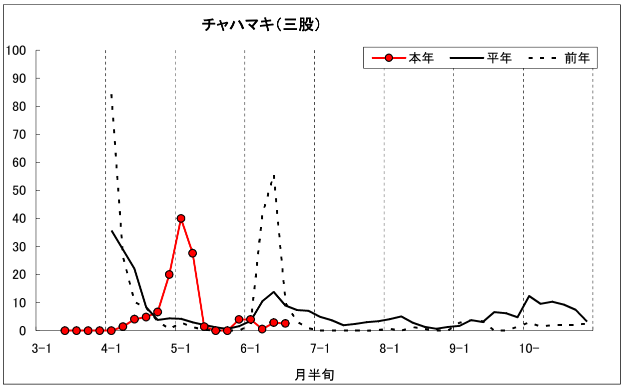
［予報の根拠］

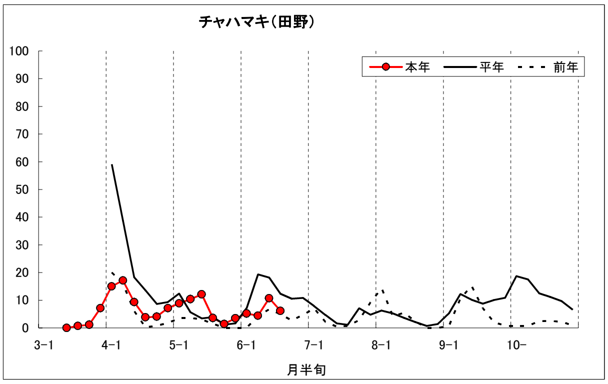
（１）６月中旬の発生面積率5.9%（平年1.1%）は平年より多、㎡当たり虫数0.1頭（平年0.0頭)は平年よりやや多である。

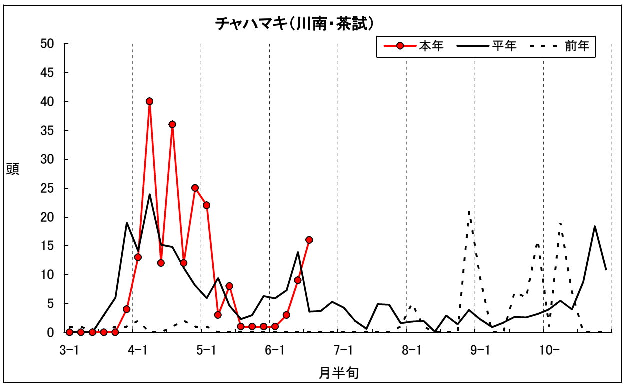
［防除上の注意］

（１）フェロモントラップ調査による発蛾最盛期は６月中旬で、ほぼ平年並で推移している。次の発蛾最盛期は７月下旬頃と考えられる。チャノコカクモンハマキの発蛾最盛期と10日以上差がなければ同時防除する。









5　チャノホソガ　（並）

［予報の根拠］

（１）６月中旬の発生面積率17.6%（平年25.1%）は平年よりやや少、㎡当り巻葉数0.9葉（平年1.1葉）は平年並である。

（２）フェロモントラップ調査では、5月末の誘殺数が平年より多い状況であった。

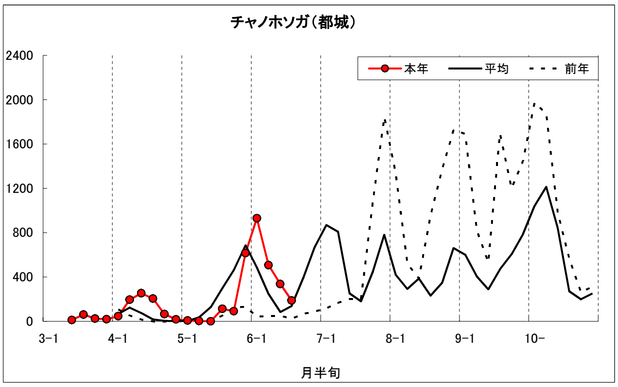
［防除上の注意］

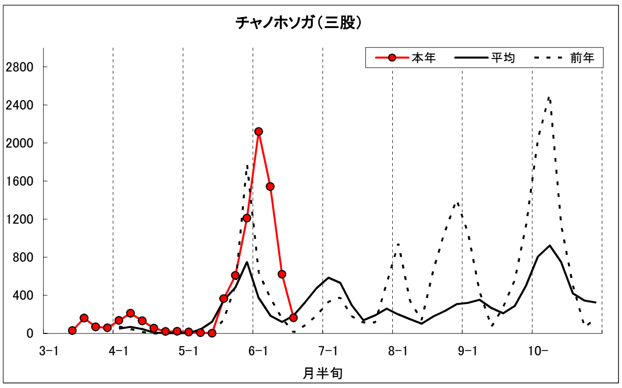
（１）フェロモントラップ調査による発蛾最盛期は、5月末から6月始めであり次の発蛾最盛期は7月上旬頃と考えられる。なお、誘殺数が多いので今後の発生に注意が必要である。

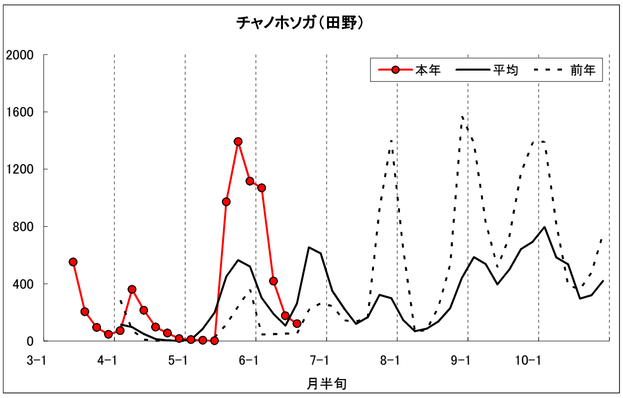
（２）三角巻葉前に防除することが必要で、発蛾最盛期の約10日後（葉裏の表皮下でトンネル状に潜孔している時期）が防除適期である。

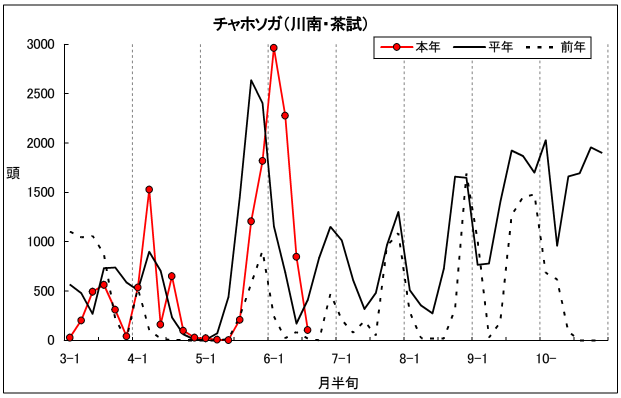
（３）脱皮阻害剤は、卵期～皮下潜葉期に散布する。

（４）巻葉が見られた茶園では、多発する恐れがあるので注意する。









6　チャノミドリヒメヨコバイ　（並）

［予報の根拠］

（１）6月中旬の見取り調査による発生面積率23.5%（平年33.9%）は平年よりやや少、

寄生葉率1.5％(平年2.2％）は平年並である。

［防除上の注意］

（１）萌芽直後から１、２葉期を重点に防除する。

7　チャノキイロアザミウマ　（並）

［予報の根拠］

（１）6月中旬の見取り調査による発生面積率70.6％(平年60.4％）は平年よりやや多、寄生葉率6.1％（平年7.6％）は平年並である。

［防除上の注意］

（１）三番茶を摘採する園では、新芽生育初期に加害されると減収程度が高いため、萌芽期の防除が重要である。

（２）深刈りなどの更新処理を行った園では、茶芽の生育期間が長く、被害を受けやすいので残効の長い薬剤で防除する。

8　クワシロカイガラムシ　（やや少）

［予報の根拠］

（１）６月中旬の発生面積率17.6％（平年34.1％）、寄生株率5.3％（平年12.4％）はいずれも平年よりやや少である。

［防除上の注意］

（１）防除適期は、幼虫ふ化開始から１週間後または幼虫ふ化最盛期なので、ふ化状況をよく観察して防除する。

（２）薬剤散布量は、成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布する。

○　農薬危被害防止運動

6月1日から8月31日は、農薬危被害防止運動月間です。農薬の適正使用により、事故防止に努めましょう。

○　その他

1　農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ　http://jppn.ne.jp

農林水産省ホームページ　http://www.maff.go.jp/nouyaku/

農林水産消費安全技術センターホームページ

http://www.acis.famic.go.jp/

2　農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。

3　発生量（程度）の区分

多　い	（高　い）	やや多いの外側１０％の度数の入る幅
やや多い	（やや高い）	平年並の外側２０％の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として４０％の度数の入る幅
やや少ない	（やや低い）	平年並の外側２０％の度数の入る幅
少ない	（低　い）	やや少ないの外側１０％の度数の入る幅

（平年値は過去１０年間の平均）

4　予察情報の種類

病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の５つです。

（１）予　報・・・・向こう１か月の発生状況を予測し、毎月２５日前後に発表する。

（２）注意報・・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。

（３）警　報・・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。

（４）特殊報・・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異

な時に発表する。
（５）防除情報・・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ **お知らせ**

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。
ホームページアドレスは、http://www.jppn.ne.jp/miyazaki です。

【文書取扱】
宮崎県病害虫防除・肥料検査センター　生頼
TEL:0985-73-6670　FAX:0985-73-2127
E-mail : byogaichu-hiryo＠pref.miyazaki.lg.jp